

大学体育における教育課程に関する研究 -特にコンテンポラリースポーツの新たな試みについて-

新潟医療福祉大学医療技術学部健康栄養学科

高橋一栄*西原康行*佐藤勝弘**

キーワード： モダンスポーツ、コンテンポラリースポーツ、教育課程

Study on Curriculum of University Physical Education Focusing on Contemporary Sports

Kazuei Takahashi*, Yasuyuki Nishihara*, Katsuhiko Sato**

Abstract

Choosing contemporary sports addition to modern sports as a vector for our university physical education, we are studying a curriculum from the following three ideas.

1. We try to incorporate new sports system and sports for disability people to learn the joy of various sports and the way to create their systems.

2. We aggressively incorporate the sports that can understand ourselves deeply because by having the rich experience of knowing our own body objectively, we can understand other's body well and it raise the nursing spirit of sharing other's pain.

3. We incorporate sports by using nature to rediscover a relationship between man and nature which we have forgotten in our modern world perhaps because of mechanization and efficiency orientation. Furthermore, we work to stimulate our students to understand that human beings are part of nature, and by observing themselves deepest welcome to raise their rich sensitivity.

The objective of this study is to observe the change of our students' attitude towards physical education by active addition of contemporary sports into the curriculum, and how and what kind of talents can grow among them.

Key words : Modern sports. Contemporary sports. Education curriculum

要旨

わたしたちは、モダンスポーツにくわえ、コンテンポラリースポーツとしてのベクトルを本学体育の中心にすえ、次の3点をもとに、教育課程を考えようとしている。

その一つは、これまでの既成のスポーツだけでなく、幅広いスポーツ経験を通して、より多様なスポーツの楽しさとその組織の仕方を身につけさせるため、ニュー・スポーツや障害者スポーツなどを取り入れること。

その二つは、自らの身体を客観的に捉え

る豊かな経験（身体活動）が、他者の身体をよりよく理解し、他者の痛みをいたわる気持ちを育てることから、自分自身をより深く知ることのできるスポーツを積極的に取り入れること。

その三つは、機械化・能率化をめざしてきた現代社会が、いつのまにか欠落させてきたもの、とくに人と自然とのかかわりをもう一度見直し、人も自然の一部であるという気づきを促し、自分自身を深く見つめることにより、感性を豊かにしていくこと

*医療福祉大学 医療技術学部 健康栄養学科 新潟市島見町1398番地

TEL : 025-257-4435 E-mail : kazue-t@nuhw.ac.jp

**新潟大学 教育人間科学部 新潟市五十嵐2の町8020番地

ができるよう、自然を中心としたスポーツを取り入れること。

本研究では、教育課程に積極的にコンテンポラリースポーツを取り入れることにより、本学学生のこれまでの体育に対する意識がどのように変化するか、さらに、新たにどのような資質が身についていくかなどを、継続的に研究することを目的としている。

1. 緒言 (目的)

近代スポーツ(以下モダンスポーツという)は、1800年代前半よりイギリスを中心に発達したものである。多木浩二は、近代スポーツを表現するにあたり、ベルナル・ジレを取り上げ、「その多くは貴族の余暇や祝祭性を持ちながら、人に競り勝つ特性を中心に発展してきた。」¹⁾と述べている。それは現在においても、4年に一度開催される近代オリンピックに継承されてきているものである。

モダンスポーツは、現在もわが国の小学校・中学校・高等学校等の体育授業で中心的に扱われてきている。具体的には既成のルールにのっとったサッカー、バスケットボール、バレーボール、陸上競技等に代表されるように、すべて競い合いが中心となっている。確かに、競い合いは本質的に人を夢中にさせる要素をもっているが、そこには両刃の剣としての危険性もあり、競い合いが過ぎるあまり体育嫌いになる場合も見受けられる。

本研究における試みは、モダンスポーツに、コンテンポラリースポーツを加えるものである。具体的内容として、一つはメルロ・ポンティに代表される、自らの身体を客観的に捉えるまなざしの豊かな経験(身体運動)が、他者の身体を自らの身体と同じ感覚で捉えることにより、他者の痛みを把握し、いたわる気持ちが生まれることを大切にしたいという言説、鷲田清一の「何

か少年や少女の事件が起こるたびに、心のケアや心の教育がどうのといった声があるが、私はすぐにはそういう発想は取れない。(中略)何か、身体が憶えた智恵や想像力、身体で学んだ判断を信じたいのだ。」²⁾という言説、また、西原の、スポーツ科学における現象学的パラダイムの重要性を指摘した「身体化するモノ」³⁾の言説から、自らの身体への気づきと関心が自らの身体への配慮を生み出し、それが他者の身体への気づきと関心を生み出し、さらに、他者の身体への配慮を生み出すという現象学的パラダイムによる視点を取り入れていこうということである。

二つは、機械化・能率化をめざしてきた20世紀における近代社会が、いつのまにか欠落させてきたものとして、人と自然とのかわりに着目し、人も自然の一部であるという気づきを促し、自然と共生する中で、自分自身を深く見つめることにより、周りの仲間や環境を大切にする気持ちを育てていこうという試みである。

そこで本研究では、教育課程においてモダンスポーツにくわえてコンテンポラリースポーツを取り入れることにより、本学学生のこれまでの体育に対する意識がどのように変化するか、さらに、どのような資質を育成することができるかについて、継続的に研究することを目的としている。

2. 研究内容

本研究では1) 基本的な教育課程をどのように構想するか2) 具体的にどのような教材をどう配置するかを主な研究内容としている。

1) 基本的な教育課程の構想

モダンスポーツにくわえ、コンテンポラリースポーツを取り入れることを意図し、つぎの3点を、本学体育の基本的な構想として位置づける。

- (1) 典型的な教材をもとに、小・中・高等学校までの学び方を再確認する活動を通して、運動とのかかわり方を理解し、生涯続けることのできるスポーツを身につけること。
- (2) 「フィジカル・フィットネス」や「ストレッチング」を体験することにより、自分自身の心と身体の気づきを通して、周りの人やものへの思いやりの心を育てること。
- (3) 自然とふれあう活動を体感することを通して、四季の微妙な変化や自然の移り変わりなどを察知する鋭敏な感性を養い、自然や人と共生する力を育てること。

本学体育では、これら三つを融合することが、すなわちコンテポラリースポーツ教育にアプローチするものと考えている。

2) 教材の開発とその配置

(1) 典型的な教材の開発

前期授業開始時オリエンテーション時に、1年次全学生322名に、小学校・中学校・高等学校までの運動経験調査(24項目)を実施した。その調査によると、これまでの運動経験で最も多かったものの一つにバレーボールがあげられた。本学の体育施設の実態及びこれまでの経験を考慮して、バレーボールを典型教材として取り上げることとした。そのコートやルールも、チャンピオンスポーツに固執せず、6面あるバドミントンコートを利用し、3対3の人数により、だれでもボールに触れることができるようルールにも工夫を加えた。⁴⁾ ボールも最初からオフィシャルなものを使わず、ソフトバレーボールを使用し、ゲームの高まりに応じてボールを変えるなど、だれもが楽しめ

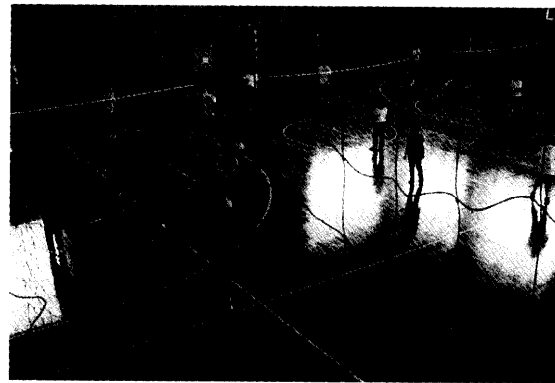


図1 6面のコートによる3人制バレーボール



図2 後期授業、グラウンドにおけるゴルフ

るよう配慮した。

(2) その他の教材とその配置

1学年前期で、バレーボールを典型教材として運動とのかかわり方を学び、後期では、その力を活用して、グループで、また、個人で、それ以外の運動とかかわり、生涯続けることのできるスポーツを獲得させたいと考えている。体育施設と教員の定数から、屋内施設では、バドミントン、テーブルテニス、バスケットボール、ソフトテニス、屋外施設では、テニス、サッカー、ゴルフから選択させ、後期前半の5時間で一つのスポーツを、後半で他のスポーツを経験させるよう意図している。

2年次、「スポーツ実践Ⅰ・Ⅱ」では、障害者や高齢者が気軽にできるニュースポーツ、たとえばユニ・ホックやフィールドゴルフなどの体験と、新たな

教材の開発を考えている。3年次「スポーツ支援Ⅰ・Ⅱ」では、さらにその幅を広げ、障害者や高齢者が中心になって行なうスポーツ、たとえばチェア・バスケットボールやチェア・スキーの体験と新たな教材の開発を意図している。

(3)フィジカル・フィットネス及びストレッチング

自分自身の身体の気づき、そして他人への配慮を考えると、フィジカル・フィットネス及びストレッチングは教材としてとくに大切である。この二つについては、授業前半では教師が中心になって、機器の使い方、基本的な行ない方等を身に付けさせ、徐々に自分でできるように考えている。これらは、1年から3年までの授業すべてに位置づけ、少しずつ日常化ができるよう意図している。

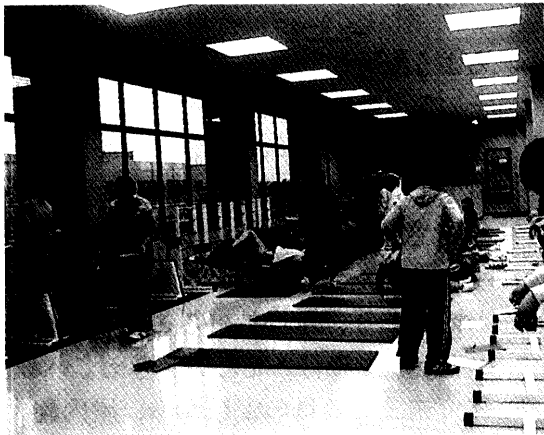


図3 フィジカル・フィットネス、ストレッチング

(4)自然とふれあう活動

本学体育の最も根幹をなす、自然体験活動については、1年から3年までのすべての学年に位置づけ、少しずつ自然とふれあう機会を増やしていこうと考えている。

1年前期では、体育授業クラスごとに



図4 松林に囲まれたキャンプサイト



図5 自然の中ローソクの光で「センス・オブ・ワンダー」を輪読する

体育授業の終了段階で、近隣公的施設、「海辺の森」での1泊2日のテント宿泊体験を行い、炊飯活動や体育テキスト「センス・オブ・ワンダー」の輪読などを通して、自然とかがわってきた。

1年後期では、集中講座として、「銀山平・尾瀬トレッキング」(2泊3日)または「スキー実習」(2泊3日)を選択し、さらに深く自然とのかかわりを体験することを意図している。2年次3年次についても、選択肢をさらに広げ、水上や水中でのスポーツであるカヌーやスキューバ・ダイビングなども取り入れることにより、いっそう自然とかわる時間と場を保障してやりたい。

これらを図示すると次のようになる。

1年次 スポーツ・健康Ⅰ・Ⅱ	2年次 スポーツ実践Ⅰ・Ⅱ	3年次 スポーツ支援Ⅰ・Ⅱ							
<table border="1"> <tr> <td data-bbox="212 465 327 1104">3人制バレーボール</td> <td data-bbox="327 465 454 1104">ストレッチング フィジカル・フィットネス</td> <td data-bbox="454 465 571 1104"> ネット型スポーツ (卓球・バド・テニス) フィールド型スポーツ (サッカー・バスケット・ハンド) </td> </tr> </table>	3人制バレーボール	ストレッチング フィジカル・フィットネス	ネット型スポーツ (卓球・バド・テニス) フィールド型スポーツ (サッカー・バスケット・ハンド)	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="608 465 718 1104">ストレッチング フィジカル・フィットネス</td> <td data-bbox="718 465 967 1104"> ニュースポーツ1・2 (ユニホック・フィールドゴルフなど) </td> </tr> </table>	ストレッチング フィジカル・フィットネス	ニュースポーツ1・2 (ユニホック・フィールドゴルフなど)	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="1003 465 1114 1104">ストレッチング フィジカル・フィットネス</td> <td data-bbox="1114 465 1362 1104"> ニュースポーツ1・2 (チェアバスケット・チェアスキー) </td> </tr> </table>	ストレッチング フィジカル・フィットネス	ニュースポーツ1・2 (チェアバスケット・チェアスキー)
3人制バレーボール	ストレッチング フィジカル・フィットネス	ネット型スポーツ (卓球・バド・テニス) フィールド型スポーツ (サッカー・バスケット・ハンド)							
ストレッチング フィジカル・フィットネス	ニュースポーツ1・2 (ユニホック・フィールドゴルフなど)								
ストレッチング フィジカル・フィットネス	ニュースポーツ1・2 (チェアバスケット・チェアスキー)								
海辺の森 トレッキング 宿泊実習 スキー実習	カヌー実習 スキューバダイビング	チェアバスケットボール チェアスキー実習 等							

図6 新潟医療福祉大学 体育教育課程

3. 調査方法

これまで教育現場での研究は、「理論に実践を当てはめる」いわゆる「Theory into (through) Practice」という考え方が主流であった。しかし、新しい教育研究の動向が、「実践の中にこそ理論がある」という考え方が、すなわち「Theory in Practice」⁵⁾へと大きく変わりつつある。筆者らは、「大学教師も、臨床の場に有って、研究者であるばかりでなく教える人であり、ともに学ぶ人である」という立場で、日常の授業をまず大切にしつつ、その授業を理論化できないかという考えに立ち授業実践を行ってきている。

とくに今回は、授業後における抽出学生

の体育に対する意識の変化を中心に報告するため、比較研究など統計的な手法が取れないことを、あらかじめ付言しておく。

1) 調査方法

抽出生による、単元終了後のアンケート調査（とくに前出図6の二重傍線内のゴシック表示の内容について調査を行なった）

2) 調査項目

ア、本学授業の充実度について

イ、体育授業をカラーで表現

小学校、中学校、高等学校までのカラーとその理由

本学授業終了後のカラーとその理

由
 ウ、教材の有用性について
 3人制バレーボール、フィジカル・フィットネス、ストレッチング、自然宿泊活動
 オ、「センス・オブ・ワンダー」レポートの分析

* 体育授業をカラーで表現させ、その理由を記述させようと考えた意図は、カラー表現が文章表現以上に直感的・感覚的に体育授業についての表出が可能と考えたからである。

2) 対象者

新潟医療福祉大学 1 学年抽出クラス3クラス166名 (回収率100%)

3) 調査期日

平成13年 7月16日～19日 (前期体育授業終了時)

4. 結果と考察

ここでは、授業の充実度およびカラーの変化と、自然体験活動のレポートについて述べることにする。

1) 本学授業の充実度について

本学体育授業経験後の結果は図7のようである。93.4% (155名) の学生が授業が充実していると積極的に受け止めていた。(図7上部) 一部授業の改善を求めるものが6.6% (11名) あり、その意見は図7下部のようになっている。

これらの意見は、モダンスポーツを経験した者特有の内容が多く、教材の関係で体育館だけの活動となったことも影響しているといえる。

授業前のアンケートによると、高校までの体育では、モダンスポーツを中心に経験してきていることがわかっている。それをカラーで表現させると、ブラック、グレー、

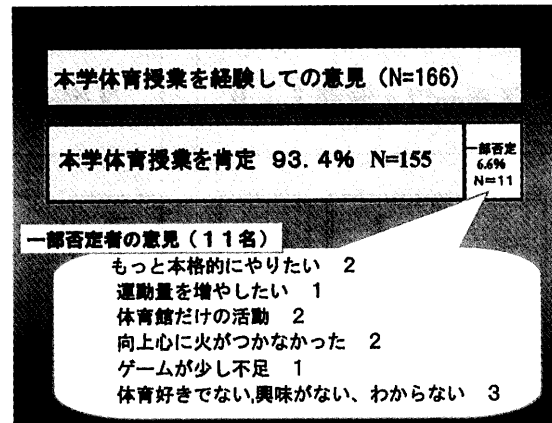


図7 体育授業経験後の意見図

ダークブルー、ブルー、レッドなどが象徴的に表出されていた。(図8左側)これらは統計処理するだけの根拠を持たないので、およその割合で示しておくが、ブラック、グレーなどは、そのカラーの根拠の意見として、「命令的、制限が多い、厳しくハードにがんばることを要求されたから」などが中心であり、ダークブルーは、それとやや似た記述、つまり、「制約的、画一的」などの記述が中心であった。

ブルーと答えたものは、体育をおおむね肯定的に受け止めており、「さわやか、すっきりしている、明るい、楽しい」などの記述が中心となっていた。レッドと答えたものの主な記述は、「懸命にがんばる、競い合い、勝敗の熱さ」などと記述しており、肯定と否定が相半ばし、モダンスポーツの特徴が特に強く表れていると推察できる。本学体育授業経験後、カラーは図8-右側のように大きく変化し、ブラック、グレー、ダークブルーなどの否定的なカラーは影をひそめ、ライトブルー、グリーン、イエロー、ピンク、ローズなどが表出されるようになってきた。その主な理由としては、「さわやか、楽しさ」に加え、「自分を知る、他人への配慮」「必要感・使命感」「ゆったり・自由・心地よさ」などがあげられていた。

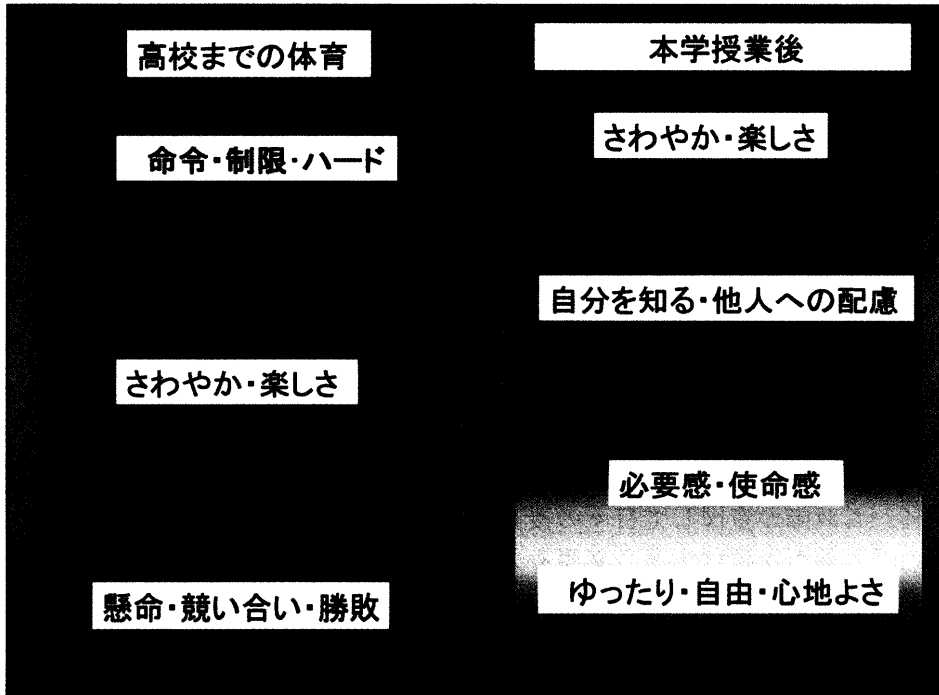


図8 高校までの体育と本学授業後のカラーの変化

主なカラーの変化を模式化すると、図9のようになる。減少したものとしては、前述したように、ブラック、ダークブルー、グレー、レッドなどがあげられ、増加したものとして、グリーン、イエロー、ピンク、ローズなどがあげられる。

本学授業後におけるカラーの変化の主な理由は、図10下部のようになっている。

その理由をみると授業に対する教師の姿勢が、大きく影響していることが推察できる。あわせて、教材の開発や、海辺の森でのキャンプ、フィジカル・フィットネス、ストレッチング、などの経験が、体育授業に

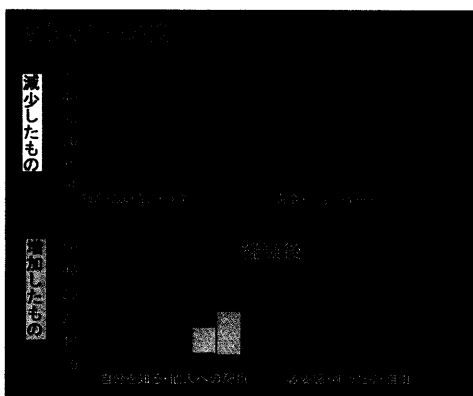


図9 授業後の主なカラーの変化

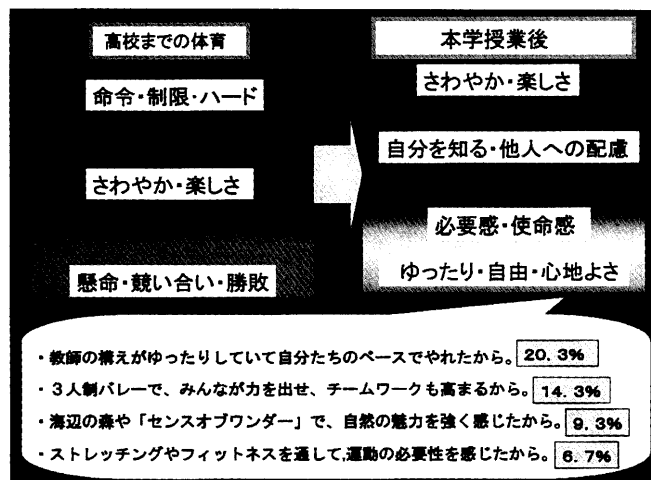


図10 授業後のカラー変化の主な理由

対する考え方を考える要因になっていると推察できる。

新しい世紀の体育授業の構成として、単にモダンスポーツだけでなく、コンテンポラリースポーツ、つまり、自分の身体や心を知ることができたり、これまで以上に仲間とかかわったり、さらには、積極的に自然とかかわることにより、小学校、中学校、高等学校の体育にはない、自分や周りの人への気づき、さらに自然へのより深い気づきが可能になると推察できる。

これらの結果から、10数回の授業ではあったが、私たち教師が意図して日々の授業を改善しようと努力を続けると、必ずその成果は表れるということがわかってきた。昨今、大学教養体育の衰退が著しいといわれているが⁹⁾ 日々授業を充実させようと努力していけば、大学教養体育授業の価値は認められ、さらにその必要性は必ず理解されると実感した。

2) 「海辺の森」キャンプで輪読したテキストのレポートについて

海辺の森において、自然の中で、本学の体育テキストであるレイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」を輪読した。前期授業終了後のレポートの課題は次のようである。

レイチェル・カーソンは、「子どもにとって、自然とのかかわりなどを通して、美しいもの、未知なるもの、神秘的なるものに目を見張る感性＝センス・オブ・ワンダーを育てること」が大切だといっています。私たちは、むしろそれは、子どもだけでなく大人にとっても、特に将来、障害のある人や高齢者等とかかわる可能性の多い、本学の学生にも必要ではないかと考えています。あなたはこのことについてどのように考えますか。考えを約800字で述べなさい。

このような課題について、レポートを提出させた。ほとんどの学生が、この問いを正対して受け止めていた。とくに、「自然とのかかわりを通して感性を育てることの大切さ」「感性は、大人にも、とくに将来、障害のある人や高齢者等とかかわる本学の学生には必要である」など、レポートの中心的な課題にアプローチしているレポートが多く見られた。そのうちいくつかを紹介し、考察を加える。一線部は、中心的な課題にアプローチしている部分を示し、**回内の記述は、それに対する執筆者の意見等である。**

「自然とのかかわり」の大切さを学んで

S・O

「センス・オブ・ワンダー」を初めて読んだキャンプの夜は、森のざわめきや突然降り出した雨によって、しばらく忘れていた自然との暮らしを、思い出させてくれた。私が幼い頃は、家の近所の山に遊びに行き、虫を捕まえたり、一本一本の木が風で揺れている音や鳥の鳴き声を聞いたりして、自然を身近に感じていた。しかし、年齢を重ねていくにつれて、そういった自然とのふれあいをしなくなっていた。

今回の輪読によって、自然との付き合い方を思い出すことができたし、同時に、今まで何気なく過ごしていた日々にも、自然と触れ合う機会があったことを改めて気づかされた。たとえばそれは、屋根を打つ雨の音であったり、新雪の上を歩くときであったりする。そういった時に私は自然が与えてくれる喜びに浸ることができたことを思い出した。(一線I)

この喜びは、私だけが味わえることではなく、誰もが味わえることだ。この自然を感じる気持ちを、将来、医療福祉の現場で出会う人々に勧めていきたい。建物の中で行う治療は、身体的な部分が多い。しかし、

屋外で散歩したり、運動したり、場合によっては、じっと太陽の光を浴びるだけでも、そこに吹く風や日の光の温かさを感じることができて、精神的に癒されることだろう。老化によって、あまり外出できなくなったお年寄りを、屋外へ連れて行くだけでも喜んでもらえるはずだ。

自然を楽しむ味わうことは、健康な私たちにとっても、病気に冒されている人にとっても、喜びを感じることであり、また精神的に癒されることである。「病は気から」という言葉があるように、心がもつ影響力は大きい。その心を癒すことができる自然との触れ合いを、私たち医療従事者は取り入れていくべきだと考えている。

このような取り組みによって、必ず高齢

者や障害者、病気で苦しむ人々の生活の質を高めることができるはずだ。そのことを、私たちは今後忘れず生かしていかなければならないと、この本を読んで強く感じた。
(-線II)

このレポートは、私たちが意図したことを明確に記述しているといえる。(-線I) 多感な幼い頃、自然に対して感じていた自然とのかかわりを思い出させることは、私たちが最も望むところである。また(-線II) 高齢者、障害者、病気で苦しむ人々の生活の質を高める(QOL) 努力を、自然とのかかわりを通して行なっていこうと考えることは、本学の学生に求められる大切な資質の一つといえる。



図11 朝日がさしこむ緑あふれるキャンプ場

センス・オブ・ワンダー」より学んだこと I・F

センス・オブ・ワンダーが大切なのはあまりにも当然だと思う。子どもにとってだとか、医療福祉の学生にとってだとかは関係ないと考えている。人間にとって大切なものであるということだと思う。本当は生きているもの全てに大切なのだろうが、もっともセンス・オブ・ワンダーを忘れてるのは人間であろうと思われるので「人間にとって」とした。

私は、センス・オブ・ワンダーを簡単に、自然を、宇宙を、感じることで解釈している。天気の良い日に外で寝転んで空を見る。私がいままで一番、センス・オブ・ワンダーの精神を感じたのは、そんな時だった。広い空、青い空への感動、流れる雲、飛ぶ鳥や虫への興味、空へ吸い込まれそうな感覚への少しの恐怖、自分という生き物の小ささの寂しさ、自分の存在の実感、あらゆる思いが湧き起こる時だ。(一線Ⅰ)

それらを感じるものが何故、どう大切なのか私にはわからない。ただ大切だと思える。なぜなら感じる前と後では明らかに気分が違うからである。どう違うのかは時によって異なる。晴れ晴れすることもあれば、切ないこともある。ただ、大きな何かに触れた気がする。

センス・オブ・ワンダーが大切というのは、自分のことや人間の世界ばかりを見ていてだけでなく、大きな世界を広い視野で見るといことなのかもしれない。大きな世界を見ることで、小さな自分について冷静に見られるようになると思う。

そう、結局センス・オブ・ワンダーは、自分を理解し育む感性ともいえるのだろう。どうりで大切なわけである。(一線Ⅱ)

私はセンス・オブ・ワンダーを感じる時が好きだ。だが、その意味を考えたことは

なかったし、これからも感じている瞬間には考えられないだろう。ただ、不思議な感覚に流されるのが一番自然に思えるし、好きなのだから。

このレポートでは、(一線Ⅰ)「センス・オブ・ワンダー」の大切を、子供とか、大人という範疇ではなく、人間にとって大切だとしている。あわせて、自分自身の経験の中で、自然のすばらしさ、畏れ、自然の中における人間の小ささなども体感的に記述している。(一線Ⅱ)では、センス、オブ、ワンダーを感じないときと感じたときでは気持ちにも大きな変化が出てくると述べて、さらに、それは自分を理解し育むためにも大切であると述べている。私たちがねらうところに鋭くアプローチしているといえる。

「センス・オブ・ワンダー」この欠くことのできないもの S・A

美しいもの、未知なるもの、神秘的なものに目を見張る感性=センス・オブ・ワンダー=は、確かにこの大学の学生には、欠くことのできないものだと考えられる。未知のもの、神秘なるものに対する好奇心は、新しい技術の発展を促す原動力なるだろう。それは医療技術の発達にもつながる。

また美しいものなどに感動できる感性をもっているということは、豊かな心をもっているということにもなる。豊かでさまざまなものに感動し共感できる心をもつことは、障害をもっている人や高齢者の置かれている状況を理解し、その人に共感するという医療の基本につながる。

そして、こうした感性は、本のなかでレイチェル・カーソンが書いているように、自然の中を探検し、あまり使っていなかった感受性を磨き、目、耳、鼻、指先の使い方を学びなおすことで鍛えられる。医療に

かかわる人間は全ての感覚を使い、クライアントに接する必要があるため、何度でもこうした感性を見つめ直し鍛える必要がある。

なにより、美しいもの、神秘的なものに目を見張ることのできる感性をもつということは、自然への畏敬の念をもち、それを愛することにつながっていく。人間も自然の一部であるため、自然を愛することは人間を愛することにもつながる。人間を愛することが医療の根底であることから、将来医療の道に進むこの大学の学生には、こうした感性は必要不可欠なものであると考えられる。(－線)

このレポートでは、(－線) 将来、医療や福祉の職務につくものにとって、感性が大切だと述べている。医療にかかわる人間は「すべての感覚を使い、クライアントに接する必要があるため、何度でもこうした感性を見つめなおし鍛える必要がある」と主張している。人間を愛することが医療の根底であり、そのためにも感性を育てることが必要だと述べている。まさに核心をつく考えといえる。

これらのレポートは、自然の大切さや、美しいもの、未知なるもの、神秘的なるものに対する畏敬の念「センス・オブ・ワンダー」の大切さを、自分なりに咀嚼して記述している。輪読などの活動が、教室や人工的なものの中で行なわれたならば、このように体験的・実感的なレポートは多くなかったのではないかと推察できる。

とくに、そのことは、「センス・オブ・ワンダー」の一節である。『「知ることは感じる」の半分も重要ではない』を共感的に引用したレポートが多く見られたことにも強く表れていることを付言しておく。

5. 結論

先に述べたように、私たちは、まず日々の授業を大切にし、その授業をもとに理論構築を図っていくという立場をとってきている。このような研究にとって、4月からこれまでの限られた時間では、十分な資料を得ることは難しかった。そのため、安易に結論を述べることはできないし、それは今後の研究に待たなければならないが、現段階で次のことが示唆できるという意味で、結論を述べる。

- 1) 小・中・高等学校で行なわれてきた、モダンスポーツ（競技スポーツ）中心の体育の教育課程に変えて、コンテンポラリースポーツを中心とした教育課程を構築することは、本学の特長及び本学学生の卒業後の進路等を鑑みた場合、有効に機能するといえる。
- 2) 日々の授業の充実こそ、学生のこれまでのコンテクストによるモダンスポーツ（競技スポーツ）に偏った既定概念を解きほぐし、新しい資質を育てるために有効であり、授業改善こそが私たち教師に課せられた最大の使命であるといえる。

6. 最後に

私たちは、新潟医療福祉大学における体育の教育課程を、「コンテンポラリースポーツを中心にして」と考え、研究を進めてきている。小学校から高等学校までのおよそ12年、(この年月はある意味では、今日の若者の公的な学習のほとんどの時間といってもよいであろう)、モダンスポーツを中心に学習してきた学生が、10数時間の本学体育の授業によって、大きく体育に対する意識を変えつつあることは私たちにとって大きな驚きである。彼らのこれまでの学校生活で培ってきた「体育観」を、本学の授業で

変えることができる可能性を見つけることができたことは、私たちの喜びとするところである。

今回は紙面の都合で、大学全体の体育経営、つまり、部活動やサークル活動、地域社会との連携、プロパガンダ戦略等については述べるができなかった。今後も、より望ましい本学全体における体育経営について、継続して研究していきたい。

*本報告は、平成13年9月27日北海道大学で行なわれた第52回日本体育学会、体育科教育学分科会で口頭発表した内容の一部をまとめたものである⁷⁾。

参考文献

- 1) 多木浩二：スポーツを考える。ちくま新書。p14. 1995.
- 2) 鷺田清一：悲鳴をあげる身体。PHP新書。p3. 2000.
- 3) 西原康行：筑波大学研究論文集。筑波大学。第23巻。p85-p88. 2001.
- 4) 高橋一栄：教師のための体育学習指導論。文久出版。p70. 1991.
- 5) 佐藤学：教育学研究 実践的探求としての教育学 技術的合理性に対する批判と系譜。p81. 日本教育学会第63巻3号。1996.
- 6) 日本体育学会第52回大会（北海道大学）。全国大学体育連合企画シンポジウム：「大学体育と評価」；配布資料。2001.
- 7) 日本体育学会第52回大会（北海道大学）,体育科教育学分科会。2001.
 - ・ 佐藤学他編著：越境する知 1 身体：よみがえる。東京大学出版会。2000.
 - ・ レイチェル・カーソン：センス・オブ・ワンダー。新潮社。1996.